

Title	L・W・パイ、S・ヴァーバ共編『政治文化と政治発展』
Sub Title	Lucian W. Pye and Sidney Verba, eds., Political culture and political development
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.7 (1970. 7) ,p.136- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19700715-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

した政治理論の諸特性を生活、仕事、思想のうちに顕現する未来の課題は、アメリカの学者（出ヨーロッパの人びとを含めて）によつて遂行されねばならない。イデオロギーを超えて、超越的基礎に向う開いた態度で、実存する人間個人の現実性に焦点をあわせながら。ポスト・モダンな世界の彼方には、開かれた社会があるだろう。

古典ギリシア哲学、ユダヤ教、キリスト教における *metanoia*、そのなかで考えあぐんでいるジェルミーノから、エレミアの嘆きが聞えてくるような気配である。政治理論の惨めな、不幸な現状への糾弾には、彼の崇高なヴィジョン、一点の欺瞞もない誠実さが透視できよう。彼の流麗な表現を正しく伝えることは無理である。ただ、彼の意図するところは理解されるだろう。それと同時に、理解はできても素直に受け容れ難いと思われる、あるいは逆に反感を誘うかも知れない、という危惧も残る。それはなによりも、著者自身の価値的コミットメントが西欧中心の**的であるからだろう**。「ポスト・モダンな時代は、現代人の諸問題に対して偉大な思想的・精神的巨匠たち——東と西の双方の——の発見をふたたび適応する可能性と新鮮な企てに溢れた時期であろう」と述べられてはいるものの、実際には、普遍的文明のための政治理論の復活というには偏頗にすぎる正統性の主張であるからだ。たとえそうではなくとも、彼の判断自体は、その意に反して、あまりにも主観的な自己発見にすぎない、と受けとられがちである。フェーゲリンを『ファシスト・イデオロギー』と批判する誤解を弁ずる彼ではあるが、少なくとも思想の水準において、ファシスト的という形容は不当であろうけれど、彼はナ

ル・ジ・スト的イデオログと映じはしないだろうか。「イデオロギーを超えてというイデオロギー」といつた煩瑣な表現は好ましくないが、ジェルミーノには鏡のなかの自分を合わせ鏡で眺めているようなところが覗える。

(奈良 和重)

Lucian W. Pye and Sidney Verba, eds.,
Political Culture and Political
Development

Princeton University Press, Princeton, New
Jersey, 1965, x + 574 pp.

L. W. パイ、S. ヴァーバ共編

『政治文化と政治発展』

はじめに

本書を紹介し批評することは、おそらく不可能であろう。それは、私自身が「政治文化概念の成立と展開」(『法学研究』四三巻一号、昭和四五年一月)と「政治文化と政治変動」(秋元律郎・内山秀夫共編、現代社会と政治体系、所収、時潮社、昭和四五年)の二編の論考をもつてしても論じえなかつたほどの展開途上の概念を集約的に論じきたり

論じさつている論集が本書だからである。またそれは、確実に集約されつくした内実とはなつていないだけの内容をもつているからでもある。

そうした可能性を十分に孕んだ概念の論旨をなぞるだけでも、おそらくは一卷の書物を必要とするはずである。それにもかかわらず、あえて蛮勇を揮おうとするのは、私自身がようやくしてつかもうとしている政治現象解析の手がかりをこの概念に見いだしかけているからにはかならない。かくて私の蛮勇は、L・W・パイの「序論 政治文化と政治発展」およびS・ヴァーバの「結論 比較政治文化」を（後述のパイの注意にもかかわらず）中心として、R・E・ウォード「日本」、R・ローズ「イギリス」、S・ヴァーバ「ドイツ」、D・A・ラストウ「トルコ」、M・ウエイナー「インド」、D・N・レヴィン「エチオピア」、J・ラパロンバラ「イタリア」、R・E・スコット「メキシコ」、L・バインダー「エジプト」、F・C・バーグホーン「ソ連」を小だしにすることに集中される。

※

かつてパイは政治発展概念を総括して、平等にたいする、一般的な精神と態度、政治体系の能力、分化と特殊化の三徴候群をあげた（『The Concept of Political Development』, *The Annals*, Vol. 338, March 1965. また拙稿「政治発展の概念とその分析方法」、『法学研究』三九巻四号、昭和四一年四月参照）。それには「どういつた特殊な側面が強調されるかに関係なく、政治発展は政治にかんする人民の信条と心情の基礎

を動かす」(90) という認識が付帯している。ここでいう「人民の信条と心情」を何とか論理的に一貫性をもたせ分析能力にビルト・インすれば、一つには人間のまっつき栄光と最も矮少な卑賤を反映するがために拒否される政治の「分類」へのぎりぎりの希望と、二つにはみずからを識るための「比較」への夢想が許されるのではなにか。

この「分類と比較」こそが比較政治学を成立させたのだし、その「希望と夢想」が方法的個人主義に連接せざるをえなかつたのだが、G・A・アームوندが提出した政治体系概念およびその推敲によつて、ようやく政治発展論に指向する方向は定まつていったといえる。それは「政治発展のダイナミックスをよりよく理解するために政治体を比較しようとするのであれば、われわれは、人民が政治行動の基礎を到達させ維持し変革する様式、および態度と心情のさまざまな構造配置の集合的な安定性と不安定性によつて分析を行わなければならない」(91) とくに凝縮していつたのである。ここに政治文化概念が政治体系論から発しながらも、政治学理論によりすぐれた貢献をなしうる可能性が提示された。

しからば、政治文化概念が前提したものはどうした情況であつたのだろうか。それは「ある特定の社会における政治行動を明らかにし、また支配している態度、心情および知覚が単なる無作為な堆積ではなくて、全体的にまとまつており、また強化もしあつている一貫性をもつたパターン」(92) であること、換言すれば「個々の人間は、自分自身の歴史的なコンテキストの中で、その国民と社会の

政治にかんする知識と感情を彼自身のパーソナリティに学びとり、組み入れねばならない」(52)ことを前提としている。ということはある社会のもつ政治文化は、動態的な心理の基礎要因によつて制限されるのだが、同時に確実な構造もあたえるのであり、「各世代はその政治を従前の世代から受けとり、それぞれがそれ独自の政治を見いだすためにその過程に反応し、またその全過程は個々人のパーソナリティの発達と社会の一般文化とを支配する法則に従うにちがいない」(53)という意味である。

アーモンドは、あらゆる政治体系は政治行為への特定の指向の類型をくみこんでいる、と指摘したが、それは、現在機能しているいかなる政治体系にあつても、政治体系に意味を、制度に規律を、そして個々人の行為に社会的連関をあたえる政治の秩序だつた主体の領域がある、ということを意味している。すなわち、「政治文化の概念は、ある社会の伝統、その公的制度の精神、市民層の情熱と集合的理性、指導者の作業操典が、歴史的経験の単なるゆき当りばつたりの産物ではなくて、意味のある総体の一部として全体的にまとまりをもつており、また明瞭な関連網を構成している」(54)のである。

かくして、政治文化は個人にたいしては、有効な政治行動をコントロールするガイドラインとなり、集合体にたいしては、制度と組織のパフォーマンスに一貫性を保証する価値と合理的な考察の体系的構造とをあたえる。したがつて、政治文化には政治理念ばかりか現に機能している規範がふくまれるのであり、政治体系の集合的

な歴史だけでなく、その現在の構成員の個々の生活史の産物でもある。ここには公的な事象と私的経験に平等に基礎をもつとする認識による政治解析視角の拡充と統合がある。

この公的事象を政治ととらえつくしたのが従来の政治学であり、私的経験に力点をおいたのが行動論的政治学であつたことはいうまでもないことである。アーモンドやイーストンが経験主義政治学を最近しきりに主張しはじめ、またパレントとマッククリーイが政治学の再編構想を提起したのも (William Parente and Mickey McCleery, "The Introduction and Structure of Political Science," *Western Political Quarterly*, Vol. XXII, No. 2, June 1969) 記したマクロミクロの政治学の断絶の統合を契機としている。この指向に、公と私の領域を概念的・分析的に架橋しなければならぬことを前提とする政治文化理論が大きな意味をもつことは当然である。パイが「政治文化とは、政治イデオロギー、国民的エートスと精神、国民の政治心理、国民の基本的価値といつた、長い間存在した諸概念と結びついた理解の大部分をより明確に、また体系的にしようとする最近の用語である」(55)とのべたのは、実はこの意味にはかなるまい。

こうした政治文化概念の効用の第二にあぐべきは、社会的・経済的要因と政治的パフォーマンスとの連関を検討するのに有効な基礎としてのそれである。「各世代の政治文化を維持し形成する社会化過程を通じて、われわれは、政治行動を規定し、決定する点で、生活の明らかに政治的な次元ばかりでなく、関連をもつた非政治的諸

次元全部のインパクトをみてとることができる。社会的・経済的な政治文化の媒介変数を研究することによって、経済発展と安定した政治変動への展望との間の関連性にかんする歴史的に重大な意味をもつた争点にとりくむことができる」(p.10)ということは、合理的選択と価値意識の重要性を一方とし、非合理的な決定要因を他とする政治行動にかんして、政治文化概念は、バランスのとれたピクチャーを提起するのに有効だ、ということである。

第三は、現代の政治的特徴である「発展」の問題にかんするこの概念の有効性である。この概念は、発展の型を決定し、また予想することにかんして、不満と失望の主たる原因となる価値の結びつきと価値の配置状況を明らかにする点で、政治発展への切りこみを約束するものである。政治を静態と認識することは——わずかに分析的便宜の場合以外には——できない。したがって、この動態論への強調がやみくもでないための突破口が政治文化概念であるかどうかを明らかにする作業が残される。

政治文化の一般的特性として第一にとりあげられるのは、あらゆる政治体における政治文化の斉一性の認識である。それにエリート文化とマス文化の存在への認識、すなわち「支配者ないし権力所有者の文化と、単なる地方的な臣民であると参加市民であるとをわづ、マス文化との間には基本的な区分がある」(p.12)との二元的認識である。もちろんこの二元性を二元性としてみただけでは何も生まれはしない。たとえばバーグホーンは、エリート文化(マルクス・レーニン主義)にたいするソビエト市民のさまざまな反応が将来の

ソビエトの発展に影響しうる状況を問題にしたが、新興諸国の場合は指導者層の政治文化に力点がおかれる。しかし、この政治文化の二元性の認識のメリットは、この両者の関係の性質による政治体系の分類が、ただちに可能だという点にもある(政治文化概念の分類能力)。ともあれ、政治文化の二元性は、二元的にとらえることで、その関連を通じてのダイナミズムの接近となるのだが、パイはなお二つの留保をあげて、このダイナミズムの複合性を指摘している。

すなわち、第一は、安定度にしても、発展度にしても、二文化間の差、度合の単なる函数ではない、という点である。第二は、安定と発展は、この二つの文化の内容の差の度合よりも、二つの文化を支えている社会化過程の差によつて影響をうける点である。後者については、本書のエチオピア、インド、メキシコの例にみられるように、二文化にはそれぞれ固有の異なつた社会化過程の存在が認められるが、イギリス、ドイツ、ソ連の例では、マス文化に一応くまこまれる社会化過程があつて、それからエリート文化に入る社会化過程があるといつた文化の重層性が指摘される。この種の重層的・連続的な文化型があれば、エリート文化の密教性にもかかわらず、政治文化として安定性は維持されるところ。

エリート文化とマス文化の分裂に加えて、伝統文化と近代文化の分裂が存在する。このギャップは確かに、政治発展のコースを決定する重大なものである。これを近代文化Ⅱエリート文化、伝統文化Ⅱマス文化と等置してはならない。むしろ、発展が進んだ時に生ずるこの分裂の表出が、都市と農村との分裂になる点が分析的に重大

である(日本とメキシコ)。すなわち、政治発展のダイナミズムは、エリート文化の持続的拡充、ないしはエリート文化によるマスコ文化のとりこみとしてはならないことである。「変動によつて、政治文化におけるさまざまなポイントで葛藤と緊張が生ずる」(p.18) ことこそ重要なのである。この点に関連して、意識的な操作を通じての政治文化変質にともなう難点と可能性を論じたヴァーバのドイツ研究は興味深い(「私自身主張する「政治」文化革命論も、こうしたコンテクストと同じ種類のものである」)。

次の問題は、「近代化しつつある政治文化における伝統的位置」である。あらゆる文化が近代文化と伝統文化の共存であることはいうまでもない。政治文化についても同断である。しかし、政治発展が伝統的な生活領域の一意的な排除と規定することは不毛ではあるが、傾向的に「人間の組織のある分野での発展は、特殊主義的な規範、機能的に無限定的な関係、伝統依存的な社会の所属本位的考慮を、より近代的な社会のより普遍主義的で、機能的に個別化し、業績本位指向的な行為のパターンでおきかえることである」(p.9; 傍点―内山)と認識することは有効である。それに「政治文化からみると、発展の問題には、古いパターンと価値の全面的な排除というよりも、その時代の国民的目標に伝統がどの程度貢献し、あるいは阻害しないかを発見できることがふくまれる。したがつて、有効な政治発展は、より近代的なものの考え方の中に多数の伝統的考慮がみいだされる固有の部分があることを必要とする」(p.16)を挿入すれば、従来のスマートな、それだから何も語るべきでなかつた

近代化論に厚み加わるはずである。いわば、政治文化における伝統の意義の強調が行なわれているのである。伝統そのものが高度の発展能力を内蔵する、とする(主としてトルコや日本から抽出された)この仮説からみると「強力で有効な伝統的体系は、人民に強固な一体意識を与えるのであれば、その後の発展にたいする理念的基礎をあたえるであろうが、伝統的な秩序のもつ力は発展をさまざまにするのであり、その度合は政治文化の何らかの新しい近代的な要素の融合を不可能にさせる程度だ」(p.21)という一般的な逆説的命題が提出されるにいたる。

エリート文化とマスコ文化、伝統文化と近代文化に政治文化の一般的特性を指摘したのだが、それはわずかに一般性が指摘されたにすぎないのであり、本論集の執筆者が展開したものは、政治文化の内容の多様性の強調であつた。しかし、その強調点が主として四点にしばられたことは確かである。すなわち、(一)信頼と不信(ないし懐疑、(二)ヒエラルヒーと平等、(三)自由と強制、(四)忠誠とコミットメント、の四点である。換言すれば、この四つの対立的な契機をもつて政治文化の内容をさぐる手がかりが共有されたといえる。それは、「この四つの価値の相互作用は、いろいろな形で政治発展に影響を及ぼしているが、おそらく最も重大な意味をもつているのは、動員と参加の増大という問題である」(p.22)点に集約される。

こうした認識的・分析的橋頭堡の設定が、各執筆者の対象領域における民主主義的な価値と慣行の抬頭・持続・維持に關心を向け支えられていることはいうをまたない。ということはずなわち、執

筆者はすべて「現代の大問題、デモクラシーと工業発展、人間の条件の改善にたいする全体主義的なアプローチと民主主義的アプローチとの競合をとり扱っている」(p. 20) 点に見てとれる。

※

以上はパイが本論集の各論から抽出してきた政治文化概念のコンテキストなことから、このコンテキストをもつて、ただちに政治文化概念の総柱としてはならないことは確かである。その意味では、S・ヴァーバの論文にしても同質である。しかし、パイとヴァーバの鮮明な差異は、後者が「比較」に集約した問題意識を提示していることである。そしてさらに基礎的な問題意識として「いかにして安定した政治体系を創出すべきか。いかにして、この種の体系をもつて、それに課せられた諸要求を解決する点で有効化しうるか。いかにして社会内での変動しつづめる環境ないし内部的変動に適應するべきか」(p. 110) が指定され、現代的な政治への対応がはつきりだされている点は留意すべきである。ヴァーバの政治文化の定義は「政治活動が行なわれる状況を規定する経験的信条・表出的シンボル・価値の体系からなる」(p. 110) とされ、おそらくはこの定義が少なくとも当分は持続しうるであろう。ということとは、この三つの視点が「政治文化アプローチ」のポイントをも形成することを意味する。この点はずでパイも指摘したところであるので多くを語る必要はない。しかし、基本的な政治的信条は、制度が、発展し、変動する様式を嚮導する点で、主たる役割をはたす、との指摘は十分問題にな

りうる。

伝統的な信条体系は変動のパターンをコントロールし、また修正するのに役だつ……。しかし、基本的な政治的信条が現行政治のパターンの維持に密接な関連をもつているにしても、このことは必ずしもあてはまるとはいえない。社会における文化のパターンは、いろいろな形で変動を生みだしうる。政治文化がすべて十分に統合され、また一貫性をもっているわけではない。この種の文化内でも緊張状態を生み出す多数の源泉がある。すなわち、それ以外の信条と矛盾する信条のセット、社会のある部分にはあるが、それ以外の部分にはない信条のセット、あるいは信条と現実との間の処理しえない不調和といったものがある。この種の環境の下では、文化は新しいより統合的な信条のセットを求める状況の一部として、変動を促進しうるであろう。さらに、ある文化にとつては、そのもつ基本的な信条体系の一部として変動をくみこむことができる(p. 120)。

この変動との関連での政治文化のとらえ方は、理論的にも分析的にも今後の開発をまっすべき領域であろう。文化と政治文化との連関の問題は発生論的にみれば重大であるが、本稿では副次的な問題である。むしろ「政治的『態度』ではなくして、政治的『文化』に照準することは、個人や特定の範疇に属する個人によつて保有されている態度ではなくて、政治体系のメンバーすべてによつて保有され

ている態度にたいする集中を意味する」(p. 52)と指摘された時に前提されている政治体系における文化的同質性の問題の方が重要である。というのは、「われわれのアプローチは、政治体系の作用——とくに、その発展と適応能力——の理解に重要だと思われる信条次元のセットをもつてはじめることである。そしてまた、政治体系のメンバーが、これらの次元にかんする態度を共有しているかどうかを問題にする」(p. 53)からである。すなわち、政治文化の諸次元が次の問題になる。この点もバイがのべたところだが、ヴァーバはさらに国民の一体意識、市民の一体意識、政府のアウトプット、決定作成過程の四局面をとりあげて内容への切りこみを提唱する。前者は信条の問題として統括できるであろうし、後二者は政府にたいする国民の側での期待としうる。もちろん広くは、すべて信条の問題として近接可能であることはいうまでもないことであるが、この部分の論旨は非常に興味ある問題が多数示唆されており、学ばべき多くの論点があるのだが、これを整理するには少なくとも一篇の論文にする必要がある。ここではこれ以上論及しないことにする。

政治的信条の諸次元を個別化する作業が行なわれたのだが、この諸次元間の関連性を個別化することの意義が次に語られる。ここで問題提起は「個々の人間が政治にくみいれられる度合がまし、政治的信条の内容が豊かになり、またより重大な意味を人間にとつてもつようになるにつれて、その人間がもつていた従来の政治的信条にいつたいどんなことがおきるだろうか。それは新しい信条によつ

ておきかえられるのか。あるいはまた新しい信条に融合するのか」(p. 54)となり、この区分は政治文化の発達を理解する上で重大な意義をもつはずである。

政治的信条が政治過程の機能を決定するのに主たる役割を演ずることは、政治的信条によつて政治過程の目標が文化的に規定される点を示している。この指摘は「政治的様式」の問題の提起である。すなわち「政治体系の全面的な目標は、信条とくに評価的な信条の構造によつて設定されるのだが、こうした目標を達成しようとする方向をもつた活動の大部分が『政治的様式』によつて規制される」(p. 55)とする論理が展開される。その場合、「政治的様式」とは第一に、政治的信条体系の構造ないしフォーマルな特性を含んでおり、信条が保有される様式としての文化的側面をいう。第二は、政治文化の体系と政治的相互作用の体系との境界部分にあつて、基本的な政治的信条が政治に適用される様式を規制する政治的相互作用のインフォーマルな規範を含んでいる。そこには開放型と閉鎖型の信条が重大に連関する。また明示型と非明示型のそれも識別能力にかかわってくる。

政治文化は学習される。この種の学習には(一)非政治的状況での経験(政治的目的にたいする態度にインパクトをもちうる経験)と(二)政治過程の機能についての経験ないし他人の経験報告、の二つの政治文化の「起源」が識別され、その各々について素描が行なわれる。その国民の政治史は当然政治文化に効果をもちうる。この場合に最も重大なのは、政治的信条の形成が政治的危機をもたらすかどうかで

ある。この問題は前述した政治文化の諸次元とのかかわりで考究される。すなわち(一)国民的の一体意識と政治史、(二)仲間市民と個人の一体意識と政治史、(三)決定作成と政治史、(四)パフォーマンクスと政治史、である。人間の累積された経験としての歴史が、ここで明確に意識化されるわけである。

ヴァーバは最後に新興諸国を使って現代の問題を次のように指摘している。

現代世界の新興諸国において、非常に過酷な負担は、そうした諸国が、こうした諸問題のどれも解決する以前に新しい政治文化を創出しなければならず、一方では、実際問題として、そうした諸国がその諸問題全部を一挙に解決しようと意図していることである (p. 360)。

おわりに

政治学において真の意味での概念とは、一つには認識的に人間の状況に接しうる、ないしは人間を嚮導しえ、他方では人間の状況を分析しうるものでなければならぬ。ということ、ヘーゲルをもちだすまでもなく、政治学的概念が歴史性にならざるべき宿命をもっていることを意味する。戦後世界を顧みるとき、この意味での政治学的概念を求める苦悶は、第三世界という特殊であるからして普遍に通じねばならぬ人間の状況のために、政治学に常に革命的状況を強制してきた。かつてD・トルーマンは行動論革命をいい、今またD・

イーストンは行動論以後の革命をいう。社会科学は変革期において発展する。それは研究者が当然もっているはずの内的緊張状態に加えて、外部的緊張状態が存在するからにはかならない。精神の中で緊張のほむらをもやし続けることは研究者の自律のエートスではあつても、そのほむらに外から油をそそがれればいよいよまさに燃焼は光輝をます。

われわれはプリミティブなシステム論から出発し、近代化とか発展をとりあげることで歴史を現代政治学にとりこむ努力をしてきた。しかし、このプロセスでわれわれはマクロの立場にたたざるをえなかつた。これにはある意味ではマクロを理論的正統とする思いあがりはなくはなかつた。ミクロの自己完結性をそのかぎりで評価する視角があつた。ミクロの側のかたくなさが両者の離反を助長したことはいふまでもない。しかし、アーモンドが一九六〇年論文でスキーム化した政治文化概念が、政治的社会的分野を研究対象としてみずえる心理学的分析の拡充によつて、ついにマクロとミクロの接点を発見した努力は重大である。

しかも、国民性とか民族的性格といつた与件ないしは先験的状況から脱出する橋頭堡ができる可能性をみいだしたことは、一つの突破でなくして何である。加うるに、政治文化として認識し、分析を通じて確認されれば、その地形図から処方箋もでるし、また嚮導方向の確定も可能性をもつてくる。そうした可能性は政治学の経験理論の意味をより明らかにする一助となりうる。本書はもちろん、先駆的研究である。したがつて、概念的な確定を求めてはなら

ない。しかし、政治学が依然として、政治価値学に一〇〇パーセント分解してしまわないで、嚴肅な綱渡りをしうることを立証した大へんな試みとして、おそらく私の研究史に確実に位置づけられるものが本書である。

(一九七〇・五・一九) (内山 秀夫)